

氏名(本籍)	いしだ たける 石田 尊(群馬県)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博甲第3033号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	日本語二格受動文の統語論的分析
主査	筑波大学教授 林 史典
副査	筑波大学教授 博士(言語学) 坪井美樹
副査	筑波大学助教授 矢澤真人
副査	筑波大学助教授 大倉 浩
副査	筑波大学助教授 P h . D . 竹 沢 幸 一

論文の内容の要旨

本論文は、日本語の二格受動文の適切な分類と統語構造の分析を試みたものである。二格受動文については、これまでに様々な分類がなされ、いくつかの統語構造の分析も試みられているが、それらは互いに他を補う形にはなっていなかった。本論文は、先行研究に示された言語現象を注意深く観察し、それを最新の理論にしたがって組み立てることにより、受動文の分類や統語構造については、いずれも、受動形態素 (r) are が有する特性の問題に還元されるという解釈を示し、日本語受動文の多様性の問題も、受動形態素の特性の多面性に由来することを主張する。

本論文の構成は、以下のとおりである。

- 序章 考察の対象と目的、構成
- 第1章 観察と記述の前提
- 第2章 二格受動文主格句の特性
- 第3章 二格受動文二格句の特性
- 第4章 有生性制限
- 第5章 二格受動文の文法的特性の記述
- 第6章 二格受動文の構造に関する提案とその検証
- 第7章 日本語受動文の多様性
- 第8章 総括と展望

「序章」では、本論文の目的、方法、全体の構成などが示される。受動文研究は、これまでに数多くの研究がなされ、もはや、現象観察レベルで新しい事実を見いだすのは困難な状態であるとさえいわれる。しかし、本論文では、受動文における数量詞遊離や再帰代名詞「自分」の束縛、場所デ格との関係、有生性制限などの現象について、改めて観察し、検討を加えていくこと、また、従来、受動文に関しては、能動文との対比から、ボイス現象の一つとして捉えることが重視されたが、むしろ「二格受動文はどのような統語的特徴を持つのか」「二格受動文の統語構造はどのようなものであるのか」「二格受動文がそのような統語構造になるのはなぜか」といった点に注目して、二格受動文そのものの文法的・統語的特徴を明かそうとすることなどが述べられる。

「第1章」では、受動文に対する先行研究について、それぞれの成果と問題点とが示されるとともに、本論文の作業仮説となる二格受動文の分類が示される。まず、先行研究の検討を通じて、直接受動文と間接受動文とに構造の違いを想定するか否か、受動文の主格句の有生性制限をどう捉えるか、その主格句の機能はどうであるか、旧主語マーカーや受動形態素 (r) are をどのように解釈するか、語根動詞の格はどのように吸収され、外項の θ 役割はどのように与えられるのかなど、二格受動文に関わる問題の洗い出しと整理が行われる。ついで、動詞の分類や形式格のシステム、空範疇の解釈など、考察の前提となる事項について、慎重かつ適切な手順に従って確認され、これらを受けて、以下のような受動文の分類が作業仮説として提示される。

直接受動文 ; 健太が涼子に殴られた
所有者主語受動文 ; 健太が涼子に (健太の) 顔を殴られた
他動詞間接受動文 ; 健太が涼子に弟を殴られた
自動詞間接受動文 ; 健太が涼子に死なれた
所有者与格受動文 ; 健太が涼子に (涼子の) 手首を切られた

「第2章」から「第4章」までは、二格受動文に関わる種々の言語現象観察が行われる。

まず、「第2章」において、二格受動文の主格句について、数量詞遊離や主格句に対する付帯状況デ句との関わりについて観察が行われる。その結果、二格受動文の主格句は、直接受動文と所有者主語受動文とでひとまとまりになり、また、他動詞間接受動文と自動詞間接受動文、所有者与格受動文でひとまとまりになることが示される。

「第3章」では、二格受動文の二格句について、数量詞遊離や「自分」との束縛関係、付帯状況デ句などとの関わりについて観察が行われる。自動詞間接受動文と所有者与格受動文の二格句は数量詞遊離が可能であることから、これらの「に」は後置詞ではなく文法格であるということ、また、場所デ句中の「自分」は、自動詞間接受動文と所有者与格受動文のほか、他動詞間接受動文の一部の二格句を先行詞とすることができることから、他動詞間接受動文における「自分」の束縛は、二格句中の名詞句による「自分」のc-制御を前提としたものではないということが示される。この他、付帯状況デ句は、直接受動文と所有者主語受動文では、語根動詞が非影響動詞である場合に限り二格句の状態を表すが、他動詞間接受動文や自動詞間接受動文、所有者与格受動文では、語根動詞に関わらず、二格句の状態を表すことができるなど、受動文の下位分類毎の共通点と相違点が示される。

「第4章」では、二格受動文の主格句および二格句における有生性制限について観察が加えられる。直接受動文の主格句では、旧主語 (能動文の主語) の有生性と関連づけられるような有生性制限が認められるが、その他の受動文の主格句では、一律に無生名詞が排除されること、自動詞間接受動文の二格句でも、有生性制限が認められることなどが示される。ただし、いずれの場合も、語根動詞そのものの項に対する選択制限によるものとは言えないことから、これらの有生性制限は、動詞の意味構造や項構造レベルでの制限ではなく、統語論あるいは談話法的な領域での制限であるという解釈が示される。

「第5章」では、「第2章」から「第4章」までの観察から、有効な一般化を導くための記述が試みられる。まず、二格受動文における語根動詞外項の削除や降格の現象が取り上げられ、行為者の削除や行為の背景化は、語根動詞が影響動詞のみに許されること、所有者与格受動文では、行為者の削除を前提とした所有者上昇が見られることなどが示されるとともに、行為者の降格と二格句の付帯状況デ句との関わりや、動詞タイプと行為者の降格との関わりなどについても論じられる。そして、自動詞間接受動文と所有者与格受動文は、文内に行為者の θ 役割を持つ要素がないこと、直接受動文と所有者主語受動文は、二格句あるいはそれが束縛する空範疇が主語特性を持つ要素ではないと考えられることから、これら4つの二格受動文において、二格句のコントロール分析が成り立たないことを指摘する。また、分離可能所有の他動詞間接受動文の二格句には主語特性がなく、所有関係のない他動詞間接受動文の二格句には主語特性があることも示される。

「第6章」では、これまでの観察や考察をもとに、日本語の二格受動文の統語構造として最も適切と考えられる

構造が提案される。生成文法が提案する動詞句内主語仮説とVPシェル構造の導入、名詞句の移動の動機などに関する検討の後、先に作業仮説として提示した受動文分類の下位分類に統語構造が示される。そして、直接受動文・所有者主語受動文・自動詞間接受動文・所有者与格受動文の4つは、語根動詞内項あるいは内項の分離不可能所有者の繰り上げ移動を伴う受動文であり、他動詞間接受動文は、繰り上げ移動を伴わない受動文と考えるのが適当であることが示され、二格受動文の多様性は、受動形態素 (r) are の多面的な語彙的な特性に還元されるという提案がなされる。

「第7章」では、有生性を条件とした名詞句の繰り上げ移動によらない受動文について考察が加えられる。旧主語が明示されない受動文や、「から」や「によって」(および例外的な「に」)によって示される受動文は、非繰り上げ移動の受動文であり、日本語の受動文は、繰り上げ移動の有無/受動形態素の外項の有無から、次の4タイプに分類されることが示される。

タイプA (+繰り上げ移動/+受動形態素外項)

自動詞間接受動文, 所有者与格受動文

タイプB (-繰り上げ移動/-受動形態素外項)

(二格) 直接受動文, 所有者主語受動文

タイプC (-繰り上げ移動/+受動形態素外項)

旧主語非明示受動文 (間接), ニヨッテ受動文 (間接),

カラ格受動文 (間接), 場所二格受動文 (間接), 他動詞間接受動文

タイプD (+繰り上げ移動/+受動形態素外項)

旧主語非明示受動文 (直接), ニヨッテ受動文 (直接),

カラ格受動文 (直接), 場所二格受動文 (直接)

「第8章」では、全体の総括が行われ、日本語受動文研究・日本語文法研究における本研究の位置づけが行われる。

審査の結果の要旨

本論文では、極めて高度な議論を展開しながらも、あくまで言語現象を前面に出し、「例証」することが徹底されている。本論文は、多くの先行研究によっているが、それらも「研究史」として羅列されるのではなく、具体的な言語現象とともに紹介され、検討される。すべての章において、理論的な課題が提示され、具体的な言語現象の分析によって、その解答が示される。理論と実証とがあるべき形で組み合わせられて、論が展開されている。

本論文の成果は、受動文の統語構造に関する詳細な記述を前提に、受動文分類を全く新しいものへと更新したところにある。本論文により、先行研究において提案され共有されてきた受動文分類の問題点が明確にされ、また、これまで例外的あるいは周辺的とされてきたような受動文についても、繰り上げ移動の有無と受影者項の有無という二つの基準によって分割された、いずれかのタイプに位置づけることが可能となった。このような、いかなる受動文も体系的な対立の中に示す分類は、これまで研究者間で共有されていた受動文観を新たなものに書き換えるものであり、今後の日本語受動文研究の議論の出発点となるべきものであると言える。

本論文は、二格受動文を考察の中心に据えているために、二格受動文以外の受動文について、考察すべき課題がいくつか論じ残されている。しかし、これらは本論文の成果を元に考察を進めて行くことによって解決される類の問題であり、本論文の学位論文としての価値をおとしめるものではない。

よって、著者は博士(言語学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。